研究紀要・年報

縄文の森から

From JOMON NO MORI

第2号

石清水型削器小考
桑波田　武志

南九州貝殻文系土器に見られる地域性について
黒川　忠広

田村式土器とその周辺（覚書）
横手　浩二郎

上野原遺跡第10地点における石材選択について
八木澤　一郎

「成川式土器」の器種組成について（予察）
－杯形土器の様相を中心に－
相美　伊久雄

古代官衙の立地
－古代の官衙は，鹿児島ではどのようなところに置かれたか－
繁昌　正幸

鹿児島県における荘園遺跡研究の現状
中村　和美

鹿児島県における古代の鍛冶遺構について
川口　雅之

墨書土器の性格
－鹿児島を例として－
坂本　佳代子・岩澤　和徳・松田　朝由

鹿児島県における中世煮炊具の一様相
上床　真

島津本家における近世大名墓の形成と特質
松田　朝由

溝状遺構の一性格
東　和幸

《実践報告》　出土木製品保存処理の現状と課題
永濵　功治

平成14年度　埋文センター年報

鹿児島県立埋蔵文化財センター

2004. 3

『縄文の森から』第２号　　目　次

石清水型削器小考　桑波田武志 …… 1

南九州貝殻文系土器に見られる地域性について　黒川　忠広 …… 11

田村式土器とその周辺（覚書）　横手浩二郎 …… 19

上野原遺跡第10地点における石材選択について　八木澤一郎 …… 23

「成川式土器」の器種組成について（予察）　相美伊久雄 …… 29

古代官衙の立地　繁昌　正幸 …… 37

鹿児島県における荘園遺跡研究の現状　中村　和美 …… 55

鹿児島県における古代の鍛冶遺構について　川口　雅之 …… 63

墨書土器の性格　坂本佳代子・岩澤和徳・松田朝由 …… 71

鹿児島県における中世煮炊具の一様相　上床　　真 …… 81

島津本家における近世大名墓の形成と特質　松田　朝由 …… 91

溝状遺構の一性格　東　　和幸 ……109

《実践報告》出土木製品保存処理の現状と課題　永濱　功治 ……117

平成14年度　年報 ……121

研究紀要

南九州貝殻文系土器に見られる地域性について

黒　川　忠　広

About the Area of a Type in Potteries with Shell-impressed Decoration in South Kyushu

Tadahiro　Kurokawa

要旨

南九州貝殻文系土器は，その名称が示すとおり南九州一帯に分布する縄文時代早期の土器群である。円筒形や角筒形，あるいはレモン形といった極めて特徴的な器形を組合せに持つこれらの中に，加栗山式土器あるいは吉田式土器に類似するが異なる施文手法を持つ一群がある。この土器は，南九州でも東南部に偏って分布する傾向が認められる。そして，田野町札ノ元遺跡においてⅦ類とされたものに代表されることから，「札ノ元Ⅶ類土器」と称し，この土器が地域的な様相を呈する土器群である可能性を指摘した。また，この背景には別府原タイプと呼ばれる東南九州に見られる土器群の存在を考え，３者の時間的な関係について示した。

キーワード　南九州貝殻文系土器　札ノ元Ⅶ類土器　別府原タイプ

1　はじめに

南九州貝殻文系土器は，南九州の縄文時代早期前半を代表する土器群である。河口貞徳によって研究の基礎が確立され（河口1955），新東晃一によって研究が深化されてきた（新東1989）。この中でも，加栗山式土器は，口縁部から底部に至るまで明瞭な角部を形成して，完成された角筒形を有する点や，二重施文という特徴のある文様構成で「華麗」とも言えるものである。そして，この段階の集落遺跡数もその前後と比較すると発見例が多く，竪穴住居跡をはじめ連穴土坑（炉穴）や集石といった様々な施設が明らかにされつつある[1]。

さて，この土器をはじめとする南九州貝殻文系土器は，「南九州」として現在の鹿児島県と宮崎県及び熊本県の南部を中心とした地域に展開するものとして取り扱われている。しかしながら，細部を観察すると，加栗山式土器若しくは吉田式土器に類似するが，施文手法や貼付文の製作貼付手法に若干の相違点が認められる資料の存在があることに気づいた。

筆者は，この相違点に注目し，このことは南九州貝殻文系土器における地域的な特徴を示す事例ではないかと考えた。よって，小稿ではこの可能性について検討を加えることを目的としている。

2　貼付文を有し二重施文を行わない資料

南九州貝殻文系土器の中で，地域的な特徴を示す可能性のあるものとして，口縁部に貼付文を有し胴部において二重施文を行わない資料がある。貼付文を有することから，加栗山式土器あるいは吉田式土器と認識されることもある。はじめに，その特徴をまとめてみたい。

器形は，口縁部が直行ないしわずかに外反するが後者の方が多い傾向にある。ほぼ直線的な胴部を経て平底の底部へと至ると思われる。口縁部径と底部径とがほぼ等しい，いわゆる筒形ではなく，口縁部径が広い深鉢形に近いものが確認されている。角筒形やレモン形といった器形は現在のところ確認されていない。

文様は，口唇部にキザミ目を施し，口縁部には横位もしくは斜位の貝殻刺突文が施文されている。横位のものは二条程度めぐっている。その下には貼付文が施されるが，口縁部文様である横位もしくは斜位の貝殻刺突文に重なって貼付されている資料もある。この貼付文は，粘土紐状のものとクサビ状を意識しているものとがあるが，逆三角形状のはっきりとしたクサビ形は呈していないものが多い。胴部は，横位の貝殻条痕文もしくは斜位の貝殻条痕文で，先に示した貼付文は口縁部文様同様にこの上に重ねられている場合も多い

この資料の加栗山式土器との違いは，胴部の貝殻条痕文の上に貝殻刺突文を重ねないところにあり，吉田式土器との違いは，貝殻条痕文が押引かないというところにある。また，吉田式土器の押引文は横方向に展開する施文パターンであることに対して，このタイプの土器は横位のものも見られるが，その多くは斜位を基本として，下方から上方へと施文するという特徴が見られる。

この資料の分布を示すと，第１図・第１表のように南九州でも東部に多い傾向がうかがわれる。これらの資料は，現在のところ単独で出土する例はほとんどな

番号	遺　跡　名	所　在　地
1	天ケ城跡	宮崎県東諸県郡高岡町大字内山3003-56
2	権現原第2遺跡	宮崎県宮崎郡清武町船引字安ケ野
3	杉木原遺跡	宮崎県宮崎郡清武町大字今泉字杉木原
4	札ノ元遺跡	宮崎県宮崎郡田野町字札ノ元
5	上城跡遺跡	宮崎県日南市楠原字北平
6	宮田遺跡	鹿児島県曽於郡大隅町月野岩元宮田
7	高篠坂遺跡	鹿児島県曽於郡財部町南俣高篠坂

第１表　札ノ元Ⅶ類土器出土遺跡一覧

第１図　札ノ元Ⅶ類土器出土遺跡地図

く，既存の南九州貝殻文系土器と共に各遺跡とも出土する傾向にある。

また，出土量も報告書で判断する限りでは決して多いとは言えない。

さて，この資料が，比較的まとまって発見報告されている遺跡としては，宮崎郡田野町札ノ元遺跡がある。札ノ元遺跡では，「口縁部にのみ貝殻腹縁連続押圧文を施文し，胴部は貝殻条痕文のみでクサビ形貼り付け突帯を有する円筒平底」としてⅦ類に分類されている。さらに，「鹿児島県内ではあまり類例がない。（中略）円筒形のみの器形であり，クサビ形張付け突帯も形がシャープでなく，粘土ひもを簡単に張り付けただけの粗雑なもの」と述べられている（寺師1986）。

しかし，「地域差的な特徴でないとするとすればクサビ形張付け突帯を有する土器群のうちの初源形態とも考えられる」として，地域差に関してはあまり積極的に述べられていない。だが，この点に関しては貼付文の縦横の間隔が比較的狭く，加栗山式土器から吉田式土器への型式変化の方向性から見ると，加栗山式土器でも後出の特徴であり，この段階で二重施文をおこなわない点は，主体的に出土する鹿児島県下の状況と大きく異なっている。この問題に関しては，次節以降に論を展開するとして，当資料がまとまって出土している札ノ元遺跡の名称及び分類を用いて，ここでは「札ノ元Ⅶ類土器」と呼ぶこととする[2]。

次に，札ノ元Ⅶ類土器が出土している主な遺跡の資料を概観してみたい。

①高岡町天ケ城跡[3]（第２図１～３）

小破片のために断定は出来ないが，可能性があるものが３点図化されている。口唇部は平坦でキザミ目を有する。口縁部は直行し，横位の貝殻刺突文を２条施す。貼付文は，この貝殻刺突文の上に一部重なって貼付されている。胴部は横位の貝殻条痕文の可能性が考えられる。

②清武町権現原第２遺跡[4]（第２図４～９）

小破片も含めて10点が図化されている。９のように，貼付文を貼り付ける部分を無文化させているものもある。７は，ほぼ全体像が掴める数少ない資料である。この資料の貼付文は比較的クサビ状を意識して貼付されている。口縁部はわずかに外反し，口唇部は平坦である胴部は，横位に近い貝殻条痕文を全面に施している。

③清武町杉木原遺跡[5]（第２図10）

小破片ではあるが，可能性があるものが１点図化されている。10は，口縁部はやや外反しており，貼付文は１段施されている。この貼付文間には縦位の貝殻刺突文が施されており，胴部は横位の貝殻条痕文である。

④宮崎郡田野町札ノ元遺跡[6]（第２図11～19）

９点が図示されている。これまでにも述べたように，このタイプの資料がまとまって出土しかつ分類整理された最初の遺跡でもある。口縁部はやや外反するものが多い。口唇部にはキザミ目が施され，口縁部は横位の貝殻刺突文のものと斜位の貝殻刺突文を連続させるものとがある。貼付文は１段のものと２段のものとがある。

⑤日南市上城跡遺跡[7]（第２図20～34）

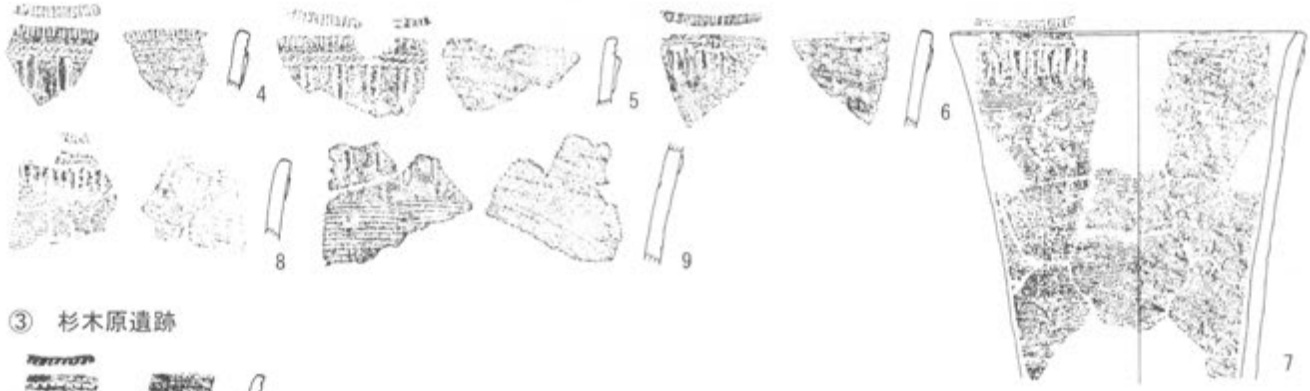
この遺跡では15点が図化されている。紹介する遺跡の中では，最も資料数が多い。口唇部は平坦でキザミ目を施す。口縁部はわずかに外反する。文様は，斜位の貝殻刺突文を連続させるものと，横位の貝殻刺突文をめぐらせるものとがある。貼付文は２段のものが多いと考えられ，細いものと太いものとが見られる。太いものに関しては器壁も厚い傾向がある。胴部は，横位に近い斜位の貝殻条痕文である。

⑥大隅町宮田遺跡[8]（第３図35）

この遺跡では，１点が報告されている。口唇部は平坦でキザミ目を施す。口縁部は外反し，横位の貝殻刺突文が２条めぐる。その下に粘土紐状の貼付文を２段

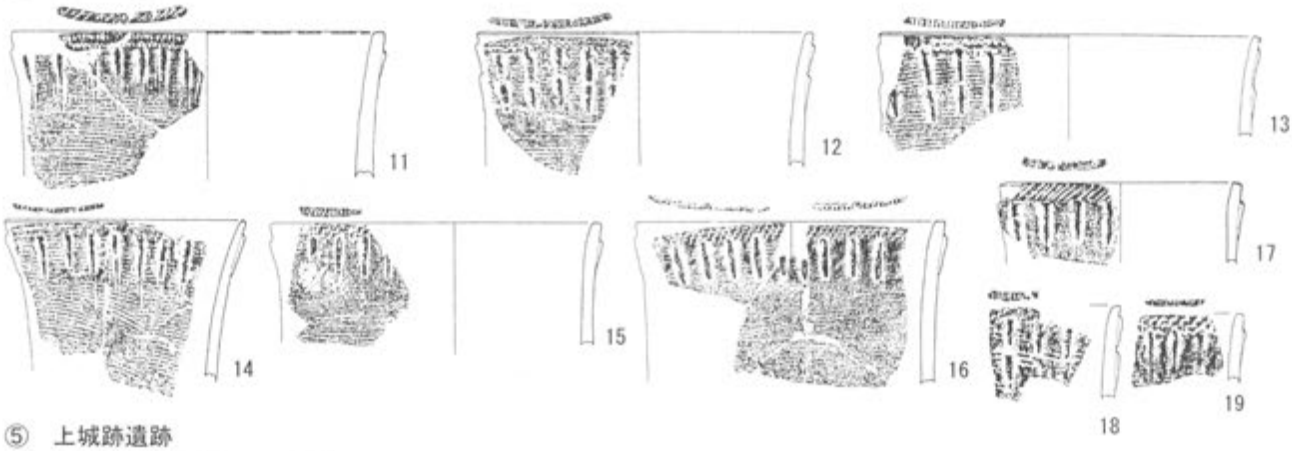
① 天ヶ城跡

② 権現原第２遺跡

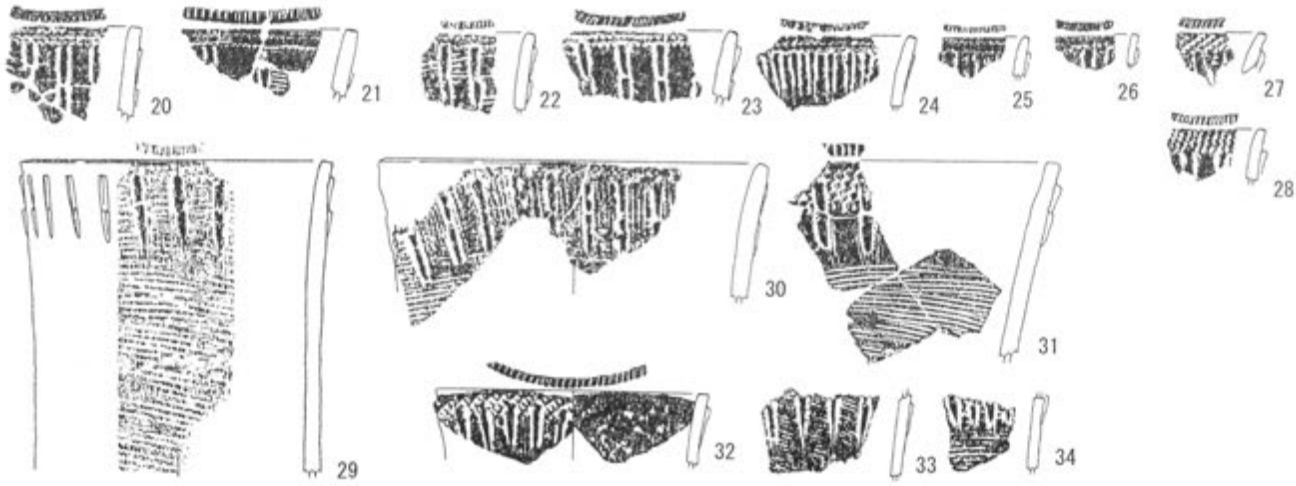


③ 杉木原遺跡

④ 札ノ元遺跡

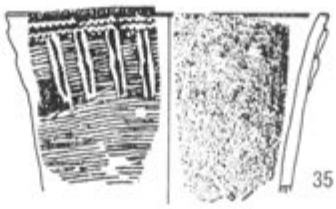


⑤ 上城跡遺跡

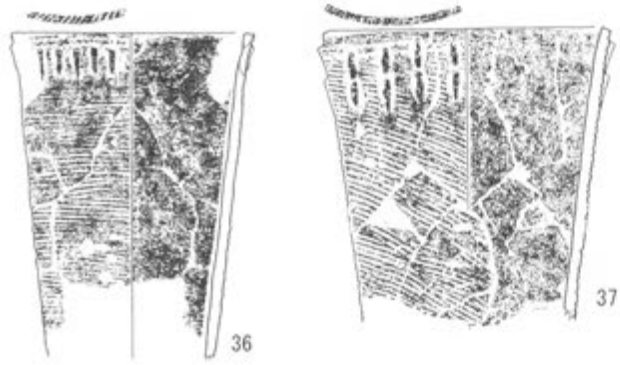


第２図　札ノ元Ⅶ類土器実測図（１）

⑥　宮田遺跡



⑦　高篠坂遺跡



第３図　札ノ元Ⅶ類土器実測図（２）

施す。胴部は横位の貝殻条痕文で，貼付文はこの上に重ねられている。

⑦財部町高篠坂遺跡[9]（第３図36・37）

７点が報告されている。36は，口縁部から底部に至るまでが残存している。口唇部は平坦でキザミ目が施されている。口縁部はわずかに外反して直線的な胴部から平底の底部へと至る。口縁部には横位の貝殻刺突文が２条めぐり，この下位に貼付文が１段めぐる。胴部は，斜位の貝殻条痕文のみで施文されており，この施文と口縁部にめぐる横位の貝殻刺突文の上に貼付文が重ねられている。口縁部には，補修孔も観察されており，外面からの縦長穿孔である。

なお，報告の中でこの資料は，吉田式土器に位置づけられている。報告書によると，「突帯部分の施文を簡略化し，貝殻条痕文を斜状に施文するスタイルは石坂式土器との関係性が考えられ，この土器形式の最終段階にあたるものと考えられる」とまとめられている。すなわち，吉田式土器終末に位置づけられていることから，南九州貝殻文系土器の範疇として理解されており，筆者が小稿で論じようとしている地域性ではなく，南九州貝殻文系土器編年の流れの中に位置づけているのである。

３　南九州貝殻文系土器との比較

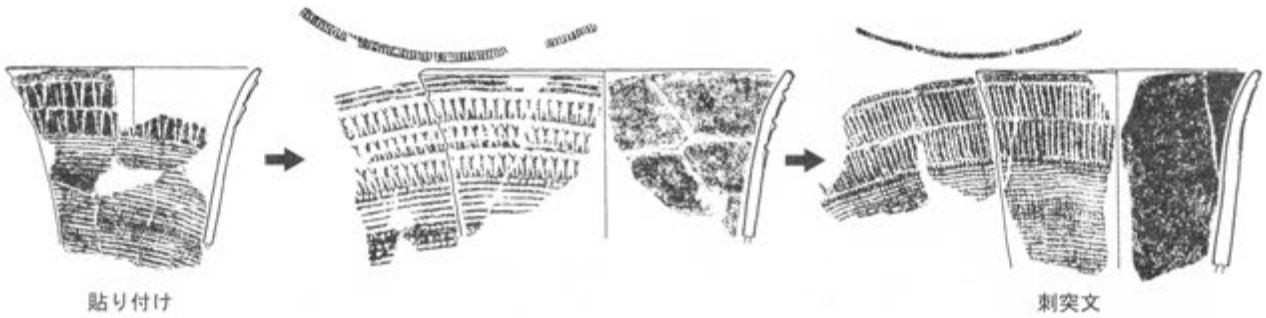
ここでは，これまで述べてきた札ノ元Ⅶ類土器の特徴を，既存の南九州貝殻文系土器と比較検討してみたい。

はじめに，貼付文の存在から加栗山式土器と吉田式土器とが注目される。この貼付文は，加栗山式土器でも初現のものにはなく，吉田式土器でも後半のものには認められない。加えて，貼付文は粘土紐状のものとクサビ形状のものとがあり，前者が古く後者が新しいことがわかっている。さらに，貼付文は１段や２段のものが多く，このような貼付文の特徴は加栗山式土器でもより吉田式土器に近い様相を呈する。このことから，札ノ元Ⅶ類土器と加栗山式土器と吉田式土器と比較し検討を進めてみたい。検討をおこなうに際し，両型式の概念を示しておきたい。

加栗山式土器とは，鹿児島市加栗山遺跡出土の資料（鹿児島県教育委員会1981）を指標とする土器で，長野眞一や前迫亮一によって呼ばれるようになったものである（長野1984，前迫1993）。器形は，円筒形・角筒形・口縁部上面観がレモン形を呈するものの三種類が見られ，口唇部は平坦であるが，口縁部は直行するタイプとやや外反するタイプとの二種類がある。文様は，基本的に口縁部に横位の貝殻刺突文を数条めぐらす。胴部は，斜位の貝殻条痕文の上に貝殻刺突文を重ねている。貝殻刺突文の間隔は，疎なものから密なものへ移行していったものと考えられる。特に疎なものは，縦位の貝殻刺突文間を斜位の貝殻刺突文で埋める手法を採っており，前段階の施文パターンに極めて近い。口縁部直下には貼付文が見られるものがある。胴部の二重施文の間隔が疎なものには粘土紐貼付文が，二重施文が密なものにはクサビ形貼付文が付く傾向にある。底部にはキザミ目が施される。

次に，吉田式土器は吉田町大原遺跡出土の土器を指標として河口貞徳によって提唱されたものである（河口1955）。河口は３タイプに（河口1989）新東は２タイプに細分している（新東1989）。器形には，円筒形・角筒形・口縁部上面観がレモン形を呈するものの三種類がある。口縁部が外反し，口唇部は平坦面を有してキザミ目が施され，口縁部には横位の貝殻刺突文がめぐる。その下にはクサビ形貼付文が密接に施されるもの・密接な貝殻刺突文を施すことでクサビ状を呈するものなどがある。胴部は，貝殻押引文を基本とした横方向への施文展開のものである。いわゆるレモン形に関しても出土量は少ない。なお，角筒形は角部形成に関して外面で明瞭な角部を形成していても，内面は丸味を呈するなど急速に角部形成の概念が崩壊している。角筒形の遺物出土量は先の加栗山式土器と比較して極めて少ない傾向が窺える。

まず，加栗山式土器と比較してみたい。札ノ元Ⅶ類土器の貼付文は，粘土紐状を呈しており，加栗山式土器にも粘土紐貼付文の段階がある。この加栗山式土器の胴部施文パターンは，斜位の貝殻条痕文の上に縦位を基調にそれらの間に斜位の貝殻刺突文を施してＸ字状やＹ字状を呈する



（根占町教育委員会2000）より

第４図　吉田式土器の貼付文変遷図

という特徴が見られる。このパターンは，前段階の施文パターンを踏襲しており，加栗山式土器でも古い様相の１つである。これに加わる貼付文が粘土紐状を呈するわけであるが，この貼付文は初源形態のものを除くと３段程度施されているものが多い。また，加栗山式土器の口縁部形状は直行するものが多く，筒状の器形を呈する。一方の札ノ元Ⅶ類土器は，外反するものが多く口縁部径と底部径との差が加栗山式土器と比べて大きく，厳密な筒状は呈していない。つまり，貼付文の形状では類似点を見いだすことが可能であるが，貼付文の貼り付け段数やプロポーションなどから，貼付文を有する加栗山式土器の中でも古段階に位置づけることは難しいと考えた。よって，器形などから判断すると，札ノ元Ⅶ類土器は加栗山式土器の貼付文が施される段階でも，より吉田式土器に近い後半部分に属するものの特徴を有しているものと思われる。

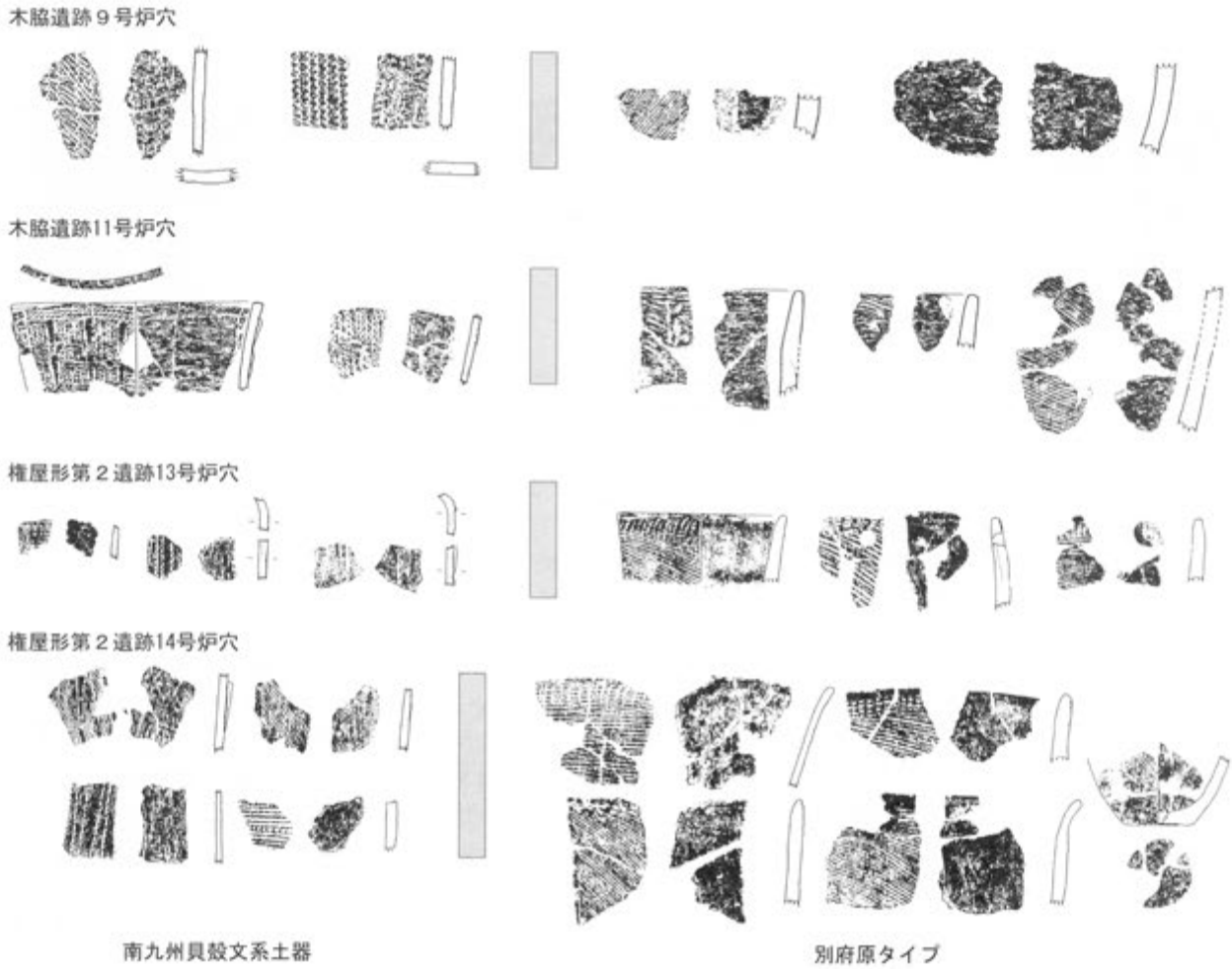
次に，吉田式土器と比較してみたい。加栗山式土器同様，貼付文に注目したい。吉田式土器前半に見られるクサビ形貼付文は，１段から２段程度貼付されるものが多く，その間隔も加栗山式土器と比較して密接である。札ノ元Ⅶ類土器では，やはり１段ないし２段のものが多く，間隔も密である。つまり，貼付文の形状こそ違うが貼付手法に関してはほぼ同じと言えよう。また，２－⑦で紹介した高篠坂遺跡では，札ノ元Ⅶ類土器は吉田式土器の最終段階として位置づけられており，この点に関しても検討してみたい。吉田式土器の最終段階に関する研究としては，新東（新東1989）や前迫（前迫1993）によってその編年観が示されている。両者共に編年の流れではほぼ一致した見解であり，吉田式土器の次には倉園Ｂ式土器を位置づけて石坂式土器へ変遷するとしている。ここで，再度クサビ形貼付文に注目してみたい。吉田式土器における貼付文は，その後半になると貝殻刺突文をＶ字状や縦位に密接して施文することで，施文間に生じた無文部分をクサビに見立てるといういわゆる痕跡器官としての様相を呈するようになる。これが，倉園Ｂ式土器や石坂式土器の口縁部に横位めぐる貝殻刺突文の下位に施文される斜位の貝殻刺突文へとつながると考えられている。このことから，「貼り付ける」という手法は吉田式土器の後半までは引き継がれないことが想定されるのである。よって，札ノ元Ⅶ類土器が吉田式土器の後半に位置づけられることは現段階では考えにくい。（第4図）

これらのことから，札ノ元Ⅶ類土器は南九州貝殻文系土器群と比較して，加栗山式土器後半から吉田式土器前半の間に位置づけられる可能性が高いと判断した

さて，岩本式土器から桑ノ丸式土器までの南九州貝殻文系土器の出土分布を見ると，吉田式土器に分布圏の狭小化が見られる。倉園Ｂ式土器に関しては，更に狭まり現在の鹿児島県内にほぼ収まっている。この後，石坂式土器まではやや狭い分布圏を有する。下剥峯式土器の段階になると，再びその分布圏は拡大していくが，おそらくは押型文土器との接触によって南九州貝殻文系土器は終焉を迎えていくものと思われる。この出土状況から，先に検討した札ノ元Ⅶ類土器が加栗山式土器の後半から吉田式土器の前半の中に納まるのであれば，分布圏の狭まる吉田式土器段階の頃の東南九州はどのような様相を呈していたのであろうか。近年飛躍的に資料が増加しているもう一つの貝殻文系土器に注目したい。

４　別府原タイプとの比較

この土器群は，面高哲郎によって取り上げられ，前平式土器に類似するが別の土器であることが早くから指摘されている（面高1988）。その後，明確な型式設定されることなく今日に至っているものであるが，近年になって金丸武司はこれを別府原タイプと称して注意を払っている（金丸2003）。ここでは，金丸の指摘にあるように，別府原タイプと称していきたい。別府原タイプは，主に東南九州に分布しているが，薩摩半島西岸部の東市来町市ノ原遺跡１地点でも出土してい



第５図　遺構内の南九州貝殻文系土器と別府原タイプ

る（鹿児島県立埋蔵文化財センター2003）。この土器と共に出土する南九州貝殻文系土器を遺構内遺物で見ていきたい。

国富町木脇遺跡（宮崎県埋蔵文化財センター2001）では，９号炉穴・11号炉穴とされたものの中から両者が出土している。この両炉穴は，単体ではなく３基の炉穴がそれぞれ切り合っているものと思われ，いくらかの時間差をもって構成されている。だが，連結部を有することで比較的崩落しやすい性質上，短期間の内に向きを変えて炉穴を構築し続けることから，一括で取り上げられたとしても時間的な開きは比較的少ないと思われる。11号炉穴内からは両者の口縁部が出土している。加栗山式土器では，クサビ形貼付文が見られ，その間の貝殻刺突文はやや密接である。口縁部もわずかに外反しており，これらの特徴から，加栗山式土器でも後半のものであることが考えられる。次に，別府原タイプは口縁部と胴部の施文方向がやや異なっているが口縁部に刺突文などを施さないタイプであることが考えられる。このことから，加栗山式土器の後半段階と別府原タイプとは時間的に極めて近い関係にあると指摘できそうである。

宮崎市椎屋形第２遺跡（宮崎市教育委員会1996）では，10数基の炉穴が切り合って検出されており，その中の13号・14号炉穴で南九州貝殻文系土器と別府原タイプとが出土している。遺構の検出状況からは，13号→14号という関係が想定されるが，多数の炉穴が複雑に切り合っているという状況や，遺物自体が小破片であるものが多く周辺部からの流れ込みである可能性が高いことなどから遺構内遺物に関しても遺構と同様の前後関係にあるとは断定しがたいようである。13号炉穴からは，加栗山式土器と口縁部に刺突文を施す別府原タイプとが出土している。さらに，この別府原タイプの中には円穿孔の補修孔を持つものがある。14号炉穴からは，加栗山式土器と吉田式土器とが出土している。別府原タイプは13号と同様のものが出土している。両遺構内の加栗山式土器は共にクサビ形貼付文を有しており，加栗山式土器でも後半のものであることがわかる。

よって，これらのことからこの２基の炉穴は南九州貝殻文系土器で見ると加栗山式土器の後半段階から吉田式土器までの範疇で理解が出来るのである。共に出土している別府原タイプには口縁部に刺突文を施すタイプと条痕のみのタイプとが見られ，両者の時間的な近時性が指摘できると思われる。

５　南九州貝殻文系土器の地域性について

これまで見てきたように，貼付文を有し二重施文を行わない札ノ元Ⅶ類土器は，加栗山式土器の後半から吉田式土器の前半に位置づけられることがわかった。また，４で検討したように加栗山式土器の後半には別府原タイプの存在がある。すなわち，加栗山式土器を介して札ノ元Ⅶ類土器と別府原タイプとはほぼ同時期であると考えられるのである。両者の施文パターンを見ると，口縁部に横位や斜位の貝殻刺突文を有し，胴部以下を斜位ないし斜位に近い貝殻条痕文で施文するなど類似点も多く指摘できる。

次に，札ノ元Ⅶ類土器に角筒形やレモン形が見られない点に注目したい。この三つの器形の組合せは，前平式土器から吉田式土器までに認められる特徴で，南九州貝殻文系土器の独自性とも言えるものである（黒川2003）。しかしながら，分布圏の東端では必ずしも三つの器形の組合せは明確ではない。さらに，札ノ元Ⅶ類土器にはいわゆる円筒形の流れを汲む深鉢形のみが存在しており，他の器形を伴っていない。別府原タイプに関しては，平口縁の深鉢のみで，角部を形成するような資料は現在のところ見あたらず，複数の器形をセットとして有する状況ではなさそうである。このことから，札ノ元Ⅶ類土器は，別府原タイプを主体とする集団と南九州貝殻文系土器を有する集団とが接触することで起こった現象として考えられるのではないだろうか。すなわち，貝殻文という同様の施文パターンを有しながらも，両者は互いに主たる分布圏を有する別のグループと考えられるのである。そして，別府原タイプの初源は少なくとも加栗山式土器以前である可能性が高い。

今回札ノ元Ⅶ類土器としたものは，南九州貝殻文系土器の分布圏と別府原タイプの分布圏とが接する地域を中心に分布していることがわかった。先に述べた比較検討などの結果，これらの三者が時間的に並行関係近い状況であったことが考えられる。

よって，加栗山式土器後半から吉田式土器前半にかけての頃には，東南九州すなわち現在の宮崎県を中心とする地方では南九州貝殻文系土器の主たる分布圏である鹿児島県地方とは異なった様相，すなわち地域性が存在していると言えるという結論に至ったのである。

６　おわりに

以上のように，南九州貝殻文系土器の中の加栗山式土器後半段階から吉田式土器の前半部分に関し，地域的な様相が認められることがわかった。さらに，加栗山式土器段階において宮崎県下には独自の型式変化を遂げたもう１つの貝殻文土器とも呼べる別府原タイプの存在も改めて浮き彫りにされた。先に述べた点などから両者はほぼ同時期である可能性が考えられ，これまで不明瞭であった南九州貝殻文系土器の地域的な展開が解明される糸口を掴めたと言えよう。

一口に南九州といっても，霧島連山や鰐塚山系などの山岳，川内川，大淀川や一ッ瀬川等の河川といった様々な地理的環境を有している。当時は，地理的環境による制約は常に隣り合わせに存在し，様々な生業活動で影響力を持っていたに違いない。このような状況が，土器型式の分布とどのような関係にあるのか，いずれはこのような視点からも研究を深化させていかなくてはならない。

最後に，小稿を執筆するにあたり多くの方々の御指導を頂いた。ここに記して感謝いたします。

金丸武司　前迫亮一　八木澤一郎　吉井秀一郎

【 註 】

1　例えば，鹿児島市加栗山遺跡や国分市上野原遺跡などを挙げることが出来る。

2　札ノ元Ⅶ類土器の概念は本文中で述べたとおりである。分布状況などから，独立一型式としても理解可能である。だが，資料数は必ずしも多くはなく，全体的な様相は不明な点もある。このことから，混乱や誤解を招かないよう慎重に取り扱うという意味も込めて「札ノ元Ⅶ類土器」と称することとした。型式設定に関しては，将来への課題としたい。

3　高岡町教育委員会　1998　『天ケ城跡』　高岡町文化財発掘調査報告書（７）

4　宮崎県埋蔵文化財センター　2001　『権現原第２遺跡ほか』　宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書（33）

5　４に同じ

6　田野町教育委員会　1986　『札ノ元遺跡ほか』　田野町文化財調査報告書（24）

7　日南市教育委員会　2002　『上城跡遺跡』　日南市文化財調査報告書（16）

8　大隅町教育委員会　1996　『宮田遺跡』　大隅町埋蔵文化財発掘調査概報（５）

9　鹿児島県立埋蔵文化財センター　2003　『高篠坂遺跡ほか』　鹿児島県立埋蔵文化財センター

発掘調査報告書（61）

【引用・参考文献】

面高哲郎　1988『前原西遺跡他』　宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書 第４集　宮崎県教育委員会

鹿児島県教育委員会　1981『加栗山遺跡他』　鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（16）

鹿児島県立埋蔵文化財センター　2003『市ノ原遺跡第１地点』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(49)

金丸武司　2003『鹿村野地区遺跡』　田野町文化財調査報告書(44)　田野町教育委員会

河口貞徳　1955「鹿児島県における貝殻条痕文土器」『鹿児島県考古学会紀要』第４号　鹿児島県考古学会

1989「吉田式と前平式のその後について」『鹿児島考古』第23号　鹿児島県考古学会

黒川忠広　2003「南九州貝殻文系土器の組合せに関する覚え書き」『縄文の森から』創刊号　鹿児島県立埋蔵文化財センター

新東晃一　1989「早期九州貝殻文系土器様式」『縄文土器大観１』小学館

寺師雄二　1986「第8章　結語」『札ノ元遺跡他』田野町文化財調査報告書　第3集　田野町教育委員会

長野眞一　1984「第５章　まとめ」『上祓川遺跡群』鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書（１）

日南市教育委員会　2002『上城跡遺跡』　日南市文化財調査報告書（16）

根占町教育委員会　2000『大中原遺跡』根占町埋蔵文化財発掘調査報告書（9）

前迫亮一　1993「倉園Ｂ遺跡の再検討１」『南九州縄文通信』№７　南九州縄文研究会

2003「石坂式土器再考」『縄文の森から』創刊号　鹿児島県立埋蔵文化財センター

宮崎県埋蔵文化財センター　2002『別府原遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告（61）

宮崎市教育委員会　1996『椎屋形第１遺跡ほか』　県営農地保全整備事業時屋地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

脱稿後，小稿中に用いた別府原タイプに関する重留康宏の論稿を目にした。重留は，宮崎県西部の縄文時代早期の遺跡を概観する中で，別府原タイプを前原西式土器と呼び，その特徴についてまとめている。

この中で，椎屋形第１遺跡の炉穴出土の知覧式（筆者の述べる加栗山式）は上層からの落ち込みである可能性を指摘しており，「前原西式は少なくとも知覧式より後続する事は無い」としている。上層という表現を用いていることを考えれば，重留は前原西式を知覧式以前と考え，この出土状況を時間的な並行関係としては見ていないものと思われ，筆者が両者の時間的な近時性を指摘した内容とは異なった見解のようである。

重留康宏　2003「宮崎県西部における縄文早期遺跡の概要－出土土器を中心として－」『九州縄文時代早期研究ノート』第１号　九州縄文時代早期研究会